

大学図書館未来構想

“知と創造の学修館”

—常に先進的で、心地よい空間の創出—

平成 29 年 12 月 15 日

金 沢 大 学

目 次

1. はじめに
 - (1) 金沢大学附属図書館の沿革
 - (2) 金沢大学未来図書館構想検討の経緯
2. 金沢大学未来図書館のビジョン
3. 近未来図書館「知と創造の学修館」の基本構想
 - (1) 基本コンセプト
 - (2) 基本方針
 - (基本方針1) 先進的な教育・研究の実践の場
 - (基本方針2) ワンストップ・サービス
 - (基本方針3) すべての利用者にとっての“安らぎと安心”の場
4. 近未来図書館「知と創造の学修館」の構成要素
 - (1) コンテンツ
 - (2) サービス
 - (3) 場
 - (4) スタッフ
 - (5) 地域連携
5. 近未来図書館「知と創造の学修館」建設場所
6. 近未来図書館「知と創造の学修館」建設後の既存図書館の活用
7. 最後に

※  は、各章の要約を示す

1. はじめに

(1) 金沢大学附属図書館の沿革

- 中央図書館、自然科学系図書館、医学図書館の3館体制
- 平成27年度文部科学省国立大学改革基盤強化促進費により、整備はほぼ完了

金沢大学中央図書館棟は、総合移転第I期事業として、平成元年7月に完成、建設から28年が経過した。平成23年3月に2階に飲食のできる「カフェ」、3階にグループ学習ができる「ラーニング・コモンズ」を設置、平成27年3月に2階トイレ、平成27年9月に3階トイレの改修、さらに平成29年度概算要求（施設整備補助金）で高効率空調設備への改修が認められ、アメニティ環境は整備される予定である。また、自然科学系図書館棟は、平成17年3月PFI事業として竣工、平成30年3月をもってPFI事業が終了する。医学図書館棟については、平成25年3月にリニューアル開館、未整備であった3F集密書架も平成27年度文部科学省国立大学改革基盤強化促進費を得て整備が完了、所期の整備が達成できた。

(2) 金沢大学未来図書館構想検討の経緯

- 「図書館を核とした知の集積、交流の場としての新たな図書館の未来構想（YAMAZAKIプラン2016）」を検討するよう学長から指示
- 附属図書館長を中心に未来の大学図書館のあるべき姿についての構想案を検討
- 構想案について、本学構成員からの意見募集を経て、図書館委員会等で審議、構想を策定

上述のとおり、最も古い中央図書館棟は、建設後28年が経過し、学長から、「図書館を核とした知の集積、交流の場としての新たな図書館の未来構想（YAMAZAKIプラン2016）」を検討するよう指示があった。部局の利害等にとらわれることなく、10年後、さらには未来の大学図書館はどうあるべきか、附属図書館長を中心として、副館長、医学図書館長、情報部長で未来構想を検討し、「知と創造の学修館」の新設に係る構想案を得た。

その後、本学構成員からの意見募集、図書館委員会等での審議を経て修正し、平成29年12月15日、本構想を策定した。

なお、本構想を作成するに当たり、本学国際基幹教育院高等教育開発・支援系教員、関連企業との面談、図書館総合展の視察、附属図書館3館（中央図書館、自然科学系図書館、医学図書館）での学生との意見交換を行うとともに、図書館職員による「大学・学問論」講義でのレポート課題、本学業務改善・改革プロジェクト「“ホッ”とできるスペース創出プロジェクトチーム」が、本学学生・教職員を対象に行った勉学や仕事の合間にリラックスして食事ができたり、気軽に休憩できたりする空間（スペース）に関してのニーズ調査を参考とした。

2. 金沢大学未来図書館のビジョン

- ▶ 人工知能等の新技術がいかに進展しようとも、人と人の直接的な交流による学びの場は不可欠
- ▶ 未来図書館は、あらゆる社会の変化に適応できる柔軟な図書館へと進化すべき

人工知能（AI）等の新たな技術により、過去から蓄積されてきた人類の情報が別の価値を創出する可能性が考えられ、2045年にはコンピューターの人工知能が人間の知能を超える「技術的特異点（シンギュラリティ）」を迎えるのではないかとされている。これまでも過去の論文の活用など学術資料の利用はあった。しかし、これらは人間の思考や判断に基づいてデータが利用されていたにすぎない。今後、人類を超える思考や判断が創出されるとするならば、過去のデータの利用に限らず、あらゆるジャンルのあらゆる記憶媒体に残された情報をもとに、人類が見落としていた新たな発見や未来への道筋が示される可能性がある。

一方、電子化がどのように進展しても、人と人の直接的な交流の場は必要不可欠である。得た情報について、人がどのように情報を活用するかをリアルなコミュニケーションで共有する「場」は、バーチャルに得ることができる電子的体験とは異なる認識力を高め、満足感を得ることができる。そのため、教員、研究者及び学生は、電子的な知では代替できない価値あるリアルな学びと多様性ある交流を求め、大学図書館を活用する。同時に、地域住民にとっても大学図書館は、長い人生における専門的キャリアを築く学びに加え、人生の幸福感を高めるための拠点の一つになることが期待される。

日本は、少子高齢化がさらに進み、10年後の平成38年には、18歳人口は現在の119万人から109万人へ、30年後には、80万人以下まで減少すると推計されており、大学の学生の構成も、留学生や社会人が大きなウェイトを占めることが予想される。未来図書館は、大学の教育研究に関わる学術情報の体系的な収集、蓄積、提供を行うという基本的機能を担いながらも、性別、人種、国籍、宗教、年齢、学歴、職歴、障がいなどの多様性を尊重しつつ、それぞれが「学ぶ」ことができる「場」を提供し、あらゆる社会変化に適応できる柔軟な図書館へと進化しなければならない。

3. 近未来図書館「知と創造の学修館」の基本構想

今後の社会構造の変化に対応し、本学の大学憲章に掲げた理念と目標を実現するため、以下の3つの基本方針に基づき、近未来図書館「知と創造の学修館」を新設

（基本方針1）先進的な教育・研究の実践の場

（基本方針2）ワンストップ・サービス

（基本方針3）すべての利用者にとっての“安らぎと安心”の場

(1) 基本コンセプト

先進的な知の創造と人類の発展に資するグローバルな人材の育成を持続的に支える近未来図書館「知と創造の学修館」を新設する。なお、本構想における「近未来」とは、「10年以内」とする。

「18歳人口の減少」、「グローバリゼーション」、「ICT技術の急速な進展」等の大きな社会構造の変化に対応し、本学の大学憲章に掲げた理念と目標を実現するため、以下の3つの基本方針に基づき、近未来図書館「知と創造の学修館」を新たに建設する。

そのことにより、金沢大学が常に高い付加価値を生み出し、21世紀における世界の先端に位置する、持続的な競争力を持った地域に根ざした総合大学になることに資する。

学術研究を預かる大学は、知の創造と人材の育成をもって世代を繋ぎ多様な社会の形成と発展に貢献してきた。「社会のための大学」とは何であるか改めて問い質さねばならない。

金沢大学は、本学の活動が21世紀の時代を切り拓き、世界の平和と人類の持続的な発展に資するとの認識に立ち、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」の位置付けをもって改革に取り組むこととし、その拠って立つ理念と目標を金沢大学憲章として制定する。【金沢大学憲章 抜粋】

(2) 基本方針

(基本方針1) 先進的な教育・研究の実践の場

10年後には、ICT技術は予想を越える速さで進歩しているであろう。そのような時代には、書籍を中心とする従来の図書館機能は中央図書館に集約し、「知と創造の学修館」には電子図書室（電子図書、データベース、自動翻訳等）を整備する。また、グループ個室を設け、世界の人々と自動翻訳機能（日本語⇄英語、中国語、他）を用いたグループ通話及びプレゼンテーションを可能とする機器を整備する。なお、電子図書室やグループ個室に備える設備・機器等は、今後の情報技術の進展・普及状況を見極めつつ、最新かつ技術の進歩にフレキシブルに対応可能なものとする。

図書館職員、ラーニング・アドバイザー、留学生ラーニング・コンシェルジュの協働による一般的な学修支援を継続しながら、サブジェクト・ライブラリアン（専門司書や定年退職者）による専門的な教育・研究活動支援を実施する。そのためのティーチング・commons、リサーチ・commons等のスペースを整備するとともに、ステークホルダー、一般市民へ本学の教育研究活動成果を常に情報発信するための場を提供する。

以上のとおり、「知と創造の学修館」では、「新技術を用いたサービスの実践」、「学習・研究支援の高度化」、「教育研究成果の発信」に関する先進的な取り組みの実践の場を提供する。

(基本方針2) ワンストップ・サービス

留学生、社会人学生を含めたすべての学生、卒業生、教職員への様々なサービス機能を集約したワンストップ・サービスを整備する。

ワンストップ・サービスに集約する機能として、学生支援機能は、学修支援、経済支援、課外活動支援、障がいのある学生支援、留学支援、インターンシップ支援、就職支援などが挙げられる。卒業生・学外者が主たる対象者であるキャリア教育相談室、学友支援室、基金室、地域連携推進室などもワンストップ・サービスに集約する。この他に、技術支援センターへの相談機能、研究支援として、学内共同教育研究施設・学内共同利用施設の利用相談機能、共同研究、受託研究等の産学官連携の総合窓口機能、また、教育支援として、総合メディア基盤センターによる教材作成支援、教育技術支援への窓口機能も含める。

(基本方針3) すべての利用者にとっての“安らぎと安心”の場

街中から離れた角間キャンパスにおいて、本学学生からは、受講する授業間の空いた時間での居場所がない、疲れたとき、リフレッシュしたいときの施設がないなどの意見が多く寄せられた。日本人学生、留学生、社会人学生、地域の方々等との交流スペースに加えて、学生へのアンケートや学生との意見交換会で要望が多くあった「くつろぎ」の場を設ける。具体的には、スポーツジム、音楽・映画鑑賞、イベントのスペースを設ける。

4. 近未来図書館「知と創造の学修館」の構成要素

(1) コンテンツ

- 本学の教育・研究を支える電子媒体学術コンテンツをユビキタスに提供
- 電子ブック、電子ジャーナル、データベース等の学習用、研究用コンテンツの充実
- 本学研究者の全研究業績を KURA から発信

本学の教育・研究を支える電子ジャーナル、データベース等の電子媒体学術コンテンツを収集・管理・保存し、全構成員に対して、可能な限りユビキタスに提供する。

- ① 授業関連資料等の学生用コンテンツを電子ブックで提供
- ② 電子図書、電子ジャーナル、データベース等の研究用コンテンツの充実
- ③ 本学研究者が執筆した学術雑誌論文等の全研究業績（博士論文を含む）を機関リポジトリ「KURA」から発信

(2) サービス

- 学習・研究支援機能の高度化
- 新技術を用いたサービスの実践
- 教育研究成果の発信

伝統的な図書館機能の充実に加え、「学習・研究支援機能の高度化」、「新技術を用いたサービスの実践」、「教育研究成果の発信」を図る。

■学習・研究支援機能の高度化

自学自習を中心とした学生生活全般の支援と知の共有・創出につながる活動を支援する。

- ① アカデミック・アドバイザー等の教員、図書館職員等の職員とラーニング・アドバイザー(LA)、留学生ラーニング・コンシェルジュ(LeCIS)等の学生の協働により、授業外での学修支援の充実、知的コミュニケーションの促進
- ② サブジェクト・ライブラリアン（専門司書や定年退職者）による専門的な教育・研究活動支援
- ③ 学生がいつでも視聴できるようオンライン講義を充実

■新技術を用いたサービスの実践

最新技術を用いたサービスを提供する。新しい施設・設備は、技術の進歩にフレキシブルに対応可能なものとする。

- ① ICチップでの蔵書管理によるサービスの高度化とセキュリティの向上
- ② AI搭載業務支援ロボットの配置による業務の効率化
- ③ 自動翻訳機能（日本語⇄英語等）を用いたグループ通話及びプレゼンテーションを可能とする機器の整備

■教育研究成果の発信

ステークホルダー、一般市民へ本学の教育研究活動を常に情報発信するための場を提供する。また、同時質疑応答が可能なネット配信でも提供する。

大学で実施している各種の公開講座にも活用し、種々のICT技術（例えば他の場所とのリアルタイムの通信など）を利用可能とする。

(3) 場

- 多様な学習空間の整備と、情報管理の自動化
- ティーチング・コモンズ及びリサーチ・コモンズ等の教育研究支援スペース
- 居心地の良いカフェなどのアメニティスペースや「くつろぎ」の場
- 地域住民を含む多様な利用者にかかれた交流スペース

以上の「コンテンツ」及び「サービス」を提供する以下の「知的・創造的交流の場」を整備する。便利・ためになる・楽しい・くつろげる等、「学修館」に来たくなるような仕掛けを用意する。

- ① 学生の多様な学習ニーズに対応した、多様な学習空間を整備し、すべての情報管理（入退室など）を自動化する。

- ② 学生生活全般を支えるワンストップ窓口
- ③ フォーマル又はインフォーマルなセミナーやワークショップ等を通じた知的活動を促進する場
- ④ 先進的な教育・研究の実践の場とするためのティーチング・コモンズ及びリサーチ・コモンズ等の教育研究支援スペース
- ⑤ 長く滞在できる居心地の良いカフェなどのアメニティスペースや学生へのアンケートや学生との意見交換会で要望が多くあった「くつろぎ」の場（スポーツジム、音楽・映画鑑賞、イベントのスペース）
- ⑥ 留学生、社会人学生、地域住民を含む多様な利用者にも開かれた交流スペース

（４）スタッフ

➤ 多様なサービスを支えるスタッフを配置

以上を支えるため次のスタッフを配置する。

- ① 教員（情報学、図書館学、博物館学）
- ② 学習支援担当職員
- ③ コンテンツ管理担当職員
- ④ 各種窓口担当職員
- ⑤ 学生スタッフ（LA、LeCIS）
- ⑥ サブジェクト・ライブラリアン

また、上記スタッフを通じて、全学の教員が何らかの形で「学修館」の活動に関わる体制を構築する。

（５）地域連携

➤ 新石川県立図書館、金沢市図書館との連携を強化

➤ 「学都金沢」にふさわしい図書館活動の機能分化

「新石川県立図書館基本構想 中間まとめ案（平成 29 年 2 月 石川県）」、「金沢市図書館機能充実検討の結果について（平成 29 年 2 月 金沢市教育委員会）」いずれの計画においても大学との連携の必要性、ネットワークの強化を提示している。石川県、金沢市と「図書館活動における知の連携協力」を行い、「学都金沢」にふさわしい図書館活動の一層の機能分化を図る。

5. 近未来図書館「知と創造の学修館」建設場所

- 【候補地 1】 総合教育棟と人間社会 5 号館棟（旧教育学部棟）の間
- 【候補地 2】 総合教育棟の南側
- 【候補地 3】 中央図書館棟の東側
- 【候補地 4】 現存の学生会館を改修
- 【候補地 5】 総合メディア基盤センターの南側 等

書籍を中心とする従来の図書館機能は中央図書館に集約し、「知と創造の学修館」は、例えば以下の候補地に新築(あるいは改修)する。なお、北地区に新築する場合には、キャンパスの開放感を損ねないよう配慮する。

【候補地 1】 総合教育棟と人間社会 5 号館棟（旧教育学部棟）の間

総合教育棟と人間社会 5 号館の間の傾斜地に半地階を含めた階段形式で建設する。特に新入生、人文系学生の利便性が高まる。

【候補地 2】 総合教育棟の南側

総合教育棟・学生会館・中央図書館のトライアングル中央に建設する。最も多く利用することとなる学生は、いずれの建物へも 5 分以内で行くことができる。

【候補地 3】 中央図書館棟の東側

中央図書館東側の傾斜地に建設する。利用する学生・教職員の動線としては、好ましいものではない。一方、自家用車で来学する学外者にとっては、専用の駐車場を確保できる場所である。

【候補地 4】 現存の学生会館を改修

学生会館を改修する。その際、角間キャンパス北地区と南地区の中央に位置し、本部棟に近い中福利施設（食堂・売店）を拡充する。

【候補地 5】 総合メディア基盤センターの南側

角間キャンパス北地区と南地区の中央に位置し、本部棟からも近い。北地区と南地区のいずれからも 10 分以内に行くことができる。

6. 近未来図書館「知と創造の学修館」建設後の既存図書館の活用

- 既存の各図書館・室は、従来の図書館機能を維持
- 中央図書館は、大学博物館的機能・大学史資料館機能を強化

既存の中央図書館・自然科学系図書館・医学図書館・保健学類図書室は、従来の書籍を中心とする図書館機能を維持する。ただし、中央図書館については、現資料館のモノ資料、文書資料に加え、学内に散在している標本類を集約する、大学博物館的機能を強化する。また、

国立公文書館等の指定を受けて学内非現用文書を集約すると同時に、本学の歴史に関する資料を網羅的に収集する大学史資料館機能を強化するものとする。

7. 最後に

- 未来図書館は、未来の金沢大学の教育・研究の構想に基づくものに
- 社会に先駆けて新たな技術と保存してきた情報との融合を図り、知的財産の新たな創出を担うことができる教育研究施設へ

大学の教育・研究活動と図書館は密接に関わっている。従って、未来の大学図書館は、未来の金沢大学の教育・研究の構想に基づくものでなければならない。2000年3月に創立50周年を記念して発表された金沢大学「キャンパス2050」では、附属図書館の50年後（2050年）の姿として「自分の部屋からもアクセスできるけど、個々の開放的な空間がある」「電子ライブラリー・ルームが整備される」「総合的な情報の受信・発信基地」「衛星通信で結ばれた大学間連携授業の開講」などを予想しているが、いくつかはすでに実現している。驚くべきスピードで情報技術が進展しており、10年後ですら予想不可能といっても過言でない。ただ、どのような時代になろうとも、大学図書館は、高等教育・科学技術分野の情報を確実に保存し、研究分野との密接な関係を生かしながら、社会に先駆けて新たな技術と保存してきた情報との融合を図り、知的財産の新たな創出を担うことができる教育研究施設として発展していかなければならない。

【図書館未来構想WG委員】

福森 義宏 附属図書館長（理事）
志村 恵 附属図書館副館長（人間社会研究域・教授）
伊藤 秀一 附属図書館副館長（理工研究域・教授）
尾崎 紀之 医学図書館長（医薬保健研究域・教授）
上地 進 情報部長

【審議経過】

平成29年11月15日 図書館委員会承認
平成29年12月 1日 情報企画会議承認
平成29年12月11日 大学改革推進委員会承認
平成29年12月15日 教育研究評議会承認